言語学、言語学出版 2007年 10大ニュース

1 ジェンダー言語研究の再出発

社会学やジェンダー研究の影響を受けてジェンダー言語研究の本がたくさん刊行。中村桃子先生の『「女ことば」はつくられる』(ひつじ書房 本体2800円)『〈性〉と日本語 ことばがつくる女と男』(NHK出版 970円)、小林千草先生の『女ことばはどこへ消えたか?』(光文社新書 850円)がでました。アカデミックな度合いの強いモノであれば、『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション行為の研究』(クレア・マリィ著 ひつじ書房 本体6,800円)もでました。クレア・マリィ先生は、10月に発足したクィア学会の発起人でもあります。

2 レトリック・メタファー研究が、花開きつつある?

『レトリック事典』(佐藤信夫ほか 大修館書店 6,500円)が発刊。アカデミックなものでは、楠見孝編『メタファー研究の最前線』(ひつじ書房 8,000円)が今年の成果。認知研究の分野で文学的な表現が注目されている。方法論は、文学研究ではなく、心理学の影響もあり実験的なものが目立つ。人文学の再構築?

3 会話の文法への注目。狭い言語学を越えて。

『月刊言語』の3月号で特集がありました。言語学においての「文」に対する捉え直しがはじまる。ひつじ書房からはシリーズ文と発話が刊行中で『時間の中の文と発話』(串田秀也・定延利之・伝康晴編)を刊行しました。2008年の4月には完結する予定です。

4 役割語への関心、ますます高まる

『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』の著者の金水敏先生が、編者となった『役割語研究の地平』(2,500円)がくろしお出版から刊行。『月刊言語』の2008年1月号では、「日本語のスタイル」が特集。役割語への関心は広まっています。人は自分をどのように人に向けて演出するか、という語用論としても面白いテーマです。

5 外国人定住化との関わりが、言語政策として重要に

『外国人住民への言語サービス』という本が明石書店からでました。日本語教育の分野では、外国人住民、外国人労働者というテーマが、大きくなっています。ひつじ書房では『外国人の定住と日本語教育[増補版]』(2,000円)を発行。2008年4月には『移住労働者とその家族のための言語政策』(予)を刊行する予定。

6 言葉の事典がたくさん。

『日本語オノマトペ事典』(小学館)、『新潮日本語漢字辞典』(新潮社)、『句読法・記号・符号活用辞典』(小学館)

7 語用論の翻訳書『意味の推定』(研究社)の発行。

8 コーパス研究の本。投野先生が大活躍(英語教育の方だが)。

9 『方言の機能(シリーズ方言学3)』(岩波書店)など方言文法に関する書籍が刊行された。ひつじ書房では『授与動詞の対照方言学的研究』(日高水穂 7400円)と『ガイドブック方言調査』(1800円)、『日本語形容詞の文法』(6000円)を刊行。

10 新しい日本語史研究が動き出す。ひつじ書房では『日本語の構造変化と文法化』(6800円)。2008年に(?)岩波書店で日本語史の講座がはじまるらしい。

言語学・言語教育の棚について、もし、お手伝いができることがあれば、何でもいたします。東京近郊であれば、お伺いしますし、もし、遠方の場合は、デジカメで写真を送って頂ければ、遠隔で恐縮ですがアドバイスできると思います。
松本エカ か 三井陽子 まで。メールアドレスは toiawase@hituzi.co.jp

ひつじ書房
www.hituzi.co.jp
〒112-0011
東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル2F
TEL 03-5319-4916 FAX 03-5319-4917